

# 点描ぐんま経済

日銀支店長

見聞録

■93■

ナシには思い入れがある。妻の名前に果物の漢字があるのにちなみ、娘2人の名前にも果物の漢字を入れてある。それが長女は「梨」だ。ただなぜだか長女はナシを好んで食べない。

昨年9月、群馬に来てまだ1週間のころ、ナンが特産と知り、榛名の「くだもの街道」を訪れた。後で榛白が、妻と次女の名前にそれぞれある「桃」と「李（プラムの意）」も特産と知った。

街道に並ぶ直売所の数は想像以上。ナシを部屋に転がし、軒先で売る店もある。この里見地区では、旬のナシ

## 里見梨

を「里見梨」ブランドで出荷している。全国の里見さん発祥の地で、南総里見八犬伝の里見氏のルーツもここだとか。ナシの名前に

も歴史ありだ。

飛び込んだ店にはナシが積まれ、箱詰め作業の真っ最中。先客の初老の夫婦は親しい方に送るのだろう、宅配便の送り状を記入している。それを見て、岡山の両親が毎年農家から白桃やマスカットを送ってくれることを思い出した。そんな風に少し感傷的になったの

## 群馬に来て1年

はその夏、感染症の流行で帰省できなかったせいでだろうか。そして、残念ながら帰省が難しい状況は今年の夏に至っても続いた。

ナシが丸ごと1個ナイフと共に渡される。こんな試食は初めてだ。店の方は「より甘い赤梨がもうなくて」

話しかけられた。妻がむいたナシを何も言わずつまむのにはびっくりしたが、われわれが出る際は「お土産は」と店の方に言ってくれ。すると売り物同様のナシを2個も渡された。「群馬で好スタートだ」とアウェー感が強かった私の緊張は和らいだ。

と恐縮するが、二十世紀はみずみずしい。買ったナシは、長女に食べさせ好きになっても

らいだ。

物もし、いろいろな群馬を知った。前橋支店の仲間にも恵まれた。皆さんに導かれるように現在にたどり着いた気がする。

らうはずが、つい私1人で食べてしまった。店では常連の方から

モモ、ナシ、プラムの旬が重なった先月、くだもの街道を再訪した。出回っていた里見梨は幸水（赤梨）で、

ろしくお願います。



渡辺真吾（わたなべ・しんご） 1972年生

まれ。岡山県出身。東京大経済学部卒、米ミシガン大で経済学博士号取得。95年に日本銀行入行後、大阪支店営業課長や金融研究所経済ファイナンス研究課長などを経て、2020年9月から現職。